

Belgrave, L. L. and Seide, K., 2019, "Grounded Theory Methodology: Principles and Practices," P. Liamputtong ed., *Handbook of Research Methods in Health Social Sciences*, Singapore: Springer, 299-316.

ベルグレイブ&ザイデ, 2019, 「グラウンデッド・セオリーの方法論：原理と実践」

レジュメ作成者による紹介

健康の社会科学という分野のハンドブックに収められたグラウンデッド・セオリーの方法論に関する概説。方法論の中核的要素についても紹介しつつ、グラウンデッド・セオリー内部におけるアプローチの違いと、各アプローチの応用例を紹介することに力点が置かれている。

1 導入

- Glaser と Strauss (1967)¹以降、グラウンデッド・セオリーの方法論 (Grounded theory methodology: 以下 GTM)²は、質的研究において最も広く用いられる方法論となった。
 - GTMは幅広い領域で浸透しているが、とくに健康やヘルスケアに関する社会科学的な理論の研究において評価されている。
- Glaser と Strauss (1967) の出版以降、GTMは、それについてのより詳細な解説と方法論内部の多様性の増大を伴いながら展開してきた。同時に、この分野は、とくに初学者にとっては圧倒されるように見え、混乱や誤解を招きうるものになっている。
- この論文で著者たちは、GTMの主要な展開を分類しながら、この方法論の重要な要素をレビューする。
 - ここでの目標は、GTMの利用可能な選択肢を明らかにし、この方法論を使いたい人々が自身のニーズに沿ったアプローチを選択できるようにすることである。

2 GTM 内部のパラダイムについての簡単な紹介

- GTMの多様なアプローチ間の差異は、パラダイムの違いに由来する。
 - K. Charmaz は、パラダイムの違いに基づいて、GTMの主要なアプローチをポスト実証主義 (postpositivist)、客観主義 (objectivist)、構築主義 (constructivist) の3つに区別している。
 - この論文では、この区別に従いつつ、少々異なるラベルを使用する。

¹ Glaser, B. G. and Strauss, A. L., 1967, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, New York: Adline De Gruyter.

² grounded theory という用語は、方法論とそれによって産出される理論の両方を指して使われることから、この論文では議論を明確にするために grounded theory methodology という語が使われている。

- GTM は客観主義の潮流の中で生み出された。
 - Glaser と Strauss（1967）のような初期の解説では、調査者が接近できる実在する社会的世界を明るみに出すための方法論が提供されている。
- ポスト実証主義は、Strauss と Corbin（1990）³とともにこの分野に取り入れられた。
 - Strauss と Corbin は、先行研究の客観主義的な前提を維持しつつ、データ分析の細かな技法を付け加えた。
 - このアプローチでは、初期のアプローチで見られた分析のエマージェントな性質は失われ、より規範的・手続き的な性質を帯びた。
- 構築主義的 GTM は、この方法論における比較的新しい展開である。
 - K. Charmaz および A. Bryant のそれぞれによって展開された解釈的なアプローチ⁴。
 - 調査者は多様な現実があることを認識し、調査者と調査協力者が相互に構築するものとしてデータを扱い、自身の分析それ自体が現実の構築であるとみなす。
 - さらに独特のアプローチとして、構築主義的 GTM をポストモダンの方向性に拡張し、状況に力点を置いた状況分析（situational analysis）がある⁵。

3 GTM：どのように・何を行うのか

- 多様な GTM の伝統に基づく健康の社会科学分野の研究者は、多くの点で異なる方法論を用いている。にもかかわらず、そこにはさまざまな立場に共通する方法の中核的な要素がある。
 - しかし、その中核的な要素として、さまざまな論者が異なる点を指摘してきた。
 - これらすべてについて限られたスペースで述べるために、ここでは 3 つのセクション（①データ収集／構築と分析、②データのコーディング、③理論的サンプリングと理論枠組みへの統合）に分けて GTM の核心部分を論じる。
 - 上記①～③の作業は、研究の中で反復的かつ同時並行的に行われるため、同時に論じることが望ましいが、ここでは便宜的に 3 つに区分している。

3-1 分析と同時並行したデータの収集／構築

- GTM はある特定のデータ形式を要求しない。
 - 研究者は、個人やフォーカス・グループへのインタビュー、文書の収集、観察、混合研究法などさまざまな戦略でデータを収集する。

³ Strauss, A. and Corbin, J., 1990, *Grounded Theory Procedures and Techniques*, Newbury Park: Sage.

⁴ Charmaz, K., 2014, *Constructing Grounded Theory*, 2nd ed, Thousand Oaks: Sage. Bryant, A., 2017, *Grounded Theory and Grounded Theorizing: Pragmatism in Research Practice*, New York: Oxford University Press など。

⁵ Clarke, A., 2009, "From Grounded Theory to Situational Analysis: What's new? Why? How?" In: Morse, J., Stern, P., Corbin, J., Bowers, B., Charmaz, K. and Clarke, A. eds., *Developing Grounded Theory: The Second Generation*, Walnut Creek: Left Coast Press, pp. 194–233 など。

- 研究者自身がデータを収集しているとみなすか、調査協力者と協同でデータを構築しているとみなすかは、依拠するパラダイムの違いに依存する。
- いずれにしても、GTM を用いる際は、最初に手元にあるデータから（後述するようなコーディングを行いながら）分析を開始し、反復的なプロセスに着手する。

3-2 データのコーディング、絶えざる比較、メモの執筆

- コーディングは GTM の分析において最も基本的なステップ。
 - コーディングとは、概念的なラベルをデータに付するプロセスであり、ラベルはそれとレリヴァントなデータが何についてのものなのかを表現するものである。
 - GTM の主要なアプローチはいずれも、複数かつ次第に抽象度をましていくコーディングの段階を含んでいる。この段階に沿いながら、データは断片化され、理論的な枠組みに再び統合される。
 - 以下の議論では、Charmaz の構築主義的なコーディング戦略を用いて説明する。
- 第 1 段階：「初期のコーディング」（他の論者の用語で「オープンコーディング」）
 - データに貼りつき、断片にラベルを付けながら、その断片で何が進行しているのかを表現する。
 - そこで何が生じているのかを見てとれるようにするためにデータを断片化する。
 - この段階のコーディングで重要なのは、さまざまな可能性に対して柔軟であること。Glaser と Strauss も、データの断片に多様なコードを付することを推奨する。
 - データをコーディングしながら、最初のメモを執筆する。メモは、研究者が分析を行う際の思考を記録するために自分自身に書き残すノートである。
 - 調査のプロセスでは、以前のデータを新しいデータと絶えず比較しながら、新しいコードを作り、再度コーディングをし、より多くのメモを作りながら、分析のアイディアを広げていく。絶えざる比較は、GTM の中核である。
- 第 2 段階：「焦点化したコーディング」
 - あるコードが頻繁に登場したり、理論的に興味深く見えてきたりする。あるいは、メモが長くなり、ストーリー性が増してくる。これらが、コーディングの次の段階に移ることを考えはじめるよう示唆する兆候となる。
 - この段階では、コーディングはより抽象度を増して、コードをカテゴリーに統合し、カテゴリーを理論的枠組みに統合しはじめる。
 - Charmaz は、焦点化したコードを作るにあたり、「どのコードがデータを最もよく説明するか？コード同士の比較は何を示唆するか？焦点化したコードはデータの欠落を明らかにするか？これらのコードはどういった種類の理論的カテゴリーを示唆するか？」などを問うことを提案する。焦点化したコードから浮き彫りになるデータの欠落に基づいて、後述の理論的サンプリングを行うことになる。

- Glaser は、上記の第 2 段階をさらに細かいステップに分ける。
 - まず、「選択的コーディング」と呼ばれる段階では、1 つの「コア変数」と関連する他の「諸変数」に焦点が当てられる。
 - それに続くのが「理論的コーディング」であり、オープンコードと選択的コードをまとめた具体的コード（substantive code）の関係を概念化することでコードを統合する。
- Corbin と Strauss は、上記の第 2 段階に相当するステップを「軸足コーディング」と呼び、カテゴリーおよびそのサブカテゴリーをより高い抽象度で関連づけて断片化したデータを再統合する⁶。
- 状況分析は、他のアプローチと同様にデータの断片化から着手するものの、そこで行う作業はコーディングでなくマッピングと呼ばれる。3 つのタイプのマッピングがある。
 - 状況マッピング：研究している状況における主要な人間、人間以外のモノ、言説その他の要素を提示し、それらの関係について分析する。
 - 社会的世界／アリーナマッピング：メゾレベルの分析を意図したもので、状況における社会組織や制度、言説に関する次元に関心を向ける。
 - 位置マッピング：データの中で採用されている、もしくは採用されていない主要な立場に焦点を当てる。
 - 著者たちは、ヘルスケアが状況や組織の中で提供され、そのすべてが組織や政治経済システムの高いレベルで行われる意思決定に影響されるという理由から、状況マッピングが健康の社会科学において大きな可能性を秘めていると考える。

3-3 理論的サンプリング、理論枠組みへのカテゴリーの統合

- 従来の GTM のアプローチは、すべて理論的サンプリングを必要とする。
 - 理論的サンプリングの目標は、ある種の代表性をもったサンプルを得ることであり、一貫した経験的パターンを記録することでもない。むしろ、研究において立ち現れた理論的カテゴリーを改良・精緻化したり、そうしたカテゴリーの特性や範囲を引き出したり、カテゴリー間の関係を浮き彫りにするために行われる。
 - 初期のコーディングよりも抽象度の高いコーディングを行う際には、アブダクションという推論形式を用いる。すなわち、不可解なデータに対してありうるすべての理論的説明を検討するために、推論上の飛躍を行う。そのうえで、データに立ち返ったり新たなデータを収集／構築したりして、ありうる説明を検証する。
 - 重要な点は、手持ちのデータに対する理論的な説明を想像し、その説明を検証するためにデータを使用することである。

⁶ 1 つのカテゴリーを軸として、その周りに他のカテゴリーを結びつける作業のため、「軸足」という語が用いられている。

4 構築主義／構成主義的 GTM と文化

- 文化は、健康、健康にかかわる信念および慣習などの社会科学的な研究において決定的に重要である。
 - ここでの文化とは、健康をめぐる論点にレリヴァントな「集団やコミュニティの生活様式の特徴」を指す。
 - 著者たちは、人類、エスニシティ、階級、ジェンダー、セクシャリティなどと交差するものとして文化を認識する。
- 著者の 1 人は、構築主義的 GTM を用いて、コレラの流行がハイチの人々の日常生活に与えた影響を調査した。
 - 彼女はハイチ出身だったが、進行する文化の変化によって、個人的および方法論的な調整が研究においては求められた。具体的には、フィールドにおける観察と反省を通じて、社会階級と肌の色に基づく階層化のダイナミズムに（再び）精通したり、メモの執筆を通じて、自身の研究者としての立場性に向き合いつづけた。
- GTM の各アプローチには、健康に関わる調査におけるこのような機微を認識するための方法論的・理論的な含意がある。

5 健康の社会科学における GTM の適用

- ここまでの GTM の重要な要素に関する説明を踏まえ、健康科学に関連した研究における GTM の多様な適用のあり方を示すため、いくつかの公刊された研究をレビューする。

5-1 Glaser の客観主義／実在論／実証主義的 GTM

- Larsson ら（2007）⁷は、自身のケアに積極的に関与する患者の経験と、そうした関与のプロセスに対する患者の期待について調査。
 - 調査チームは、スウェーデンの地方病院から募集した調査協力者とフォーカス・グループ・インタビューを実施。
 - インタビューを書き起こしたデータの分析では、絶えざる比較の方法を使用。具体的コードによって、看護における患者の参加についての調査協力者の記述を概念化。
 - 分析を通じて、看護師と患者の相互作用の要点を示した 4 つの相互関連するカテゴリーから、1 つのコアカテゴリーが生成された。
 - この研究では、Glaser のアプローチにしたがって、概念を明確にするためにパターンを概念化・説明することに焦点が当てられていた。くわえて、Glaser のアプローチと同じく、研究者と調査対象者の間には（つくられた）境界があった。この立場

⁷ Larsson, I. E., Sahlsten, M. J., Sjöström, B., Lindencrona, C. S. and Plos, K. A., 2007, "Patient Participation in Nursing Care from a Patient Perspective: A Grounded Theory Study," *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 21(3): 313-320.

では、研究対象は独自の現実に埋め込まれており、GTM を方法論的ツールとして用いることでそれを明らかにできるとされる。

5-2 Strauss と Corbin のポスト実証主義／実在論／解釈的 GTM

- Bateman ら (2013)⁸は、医学部生が「バーチャル・ペイシエント」（＝現実の臨床例のコンピュータシミュレーションで、医療教育に用いられる）からどのように学ぶのか、またそこでの人間と機械の相互作用のメカニズムを記述・予測する理論モデルを構築。
 - 1つの医学校から集めた48人の学生に、調査者が設計した「バーチャル・ペイシエント」を完了してもらおうと同時にその評価をしてもらい、フォーカス・グループ・インタビューを実施。その様子を記録、書き起こしを行い、予備的なコーディングを実施。
 - 調査者たちは、絶えざる比較によってデータの解釈を確証するよう努めた。チームとしてデータを1行ごとにコーディングし、軸足コーディングに移った。サンプリングは、分析のプロセスで生じたテーマに応じて行った（理論的サンプリング）。選択的コーディングの段階では、他のカテゴリーとも結びついた「バーチャル・ペイシエントからの学び」というコアカテゴリーを設定。
 - 調査者たちは、自分たちの調査に潜在的なバイアスがあることを認識したうえで、異なるヘルスケアの専門家からなる研究チームを招集し、理論構築のプロセスに繰り返し関与させた。
 - 調査者は、調査する事象を、調査者や調査対象者の概念体系とは独立した現実に存在する事物として扱っていた。また、非専門家の見方と専門家の見方とを区別することを受け入れていた。

5-3 Charmaz および Bryant の構築主義／解釈的 GTM

- Poteat ら (2013)⁹は、Charmaz の研究に依拠しながら、トランスジェンダーの患者がヘルスケアへのアクセスや利用において差別された経験を調査。
 - タイプしたフィールドノート、67人のインタビューの文字起こしを分析。同時に、研究をコミュニティの関心に基づかせる（ground）ために、トランスジェンダーの人々で構成された「コミュニティ・アドバイザー・ボード」を導入。
 - 研究報告書では再帰性（reflexivity）を重視し、研究プロセスにおける共同執筆者としての研究者の役割を強調。これは、構築主義的アプローチの重要な特徴である。
 - インタビュアーは、各インタビューの終了後、通常のフィールドノートとあわせて、再帰的ノート（reflexive note）を執筆。さらに1人のインタビュアーは、自分の見方と調査参加者の見方を区別するために再帰的日誌（reflexive journal）をつけた。

⁸ Bateman, J., Allen, M., Samani, D., Kidd, J. and Davies, D., 2013, "Virtual Patient Design: Exploring What Works and Why. A Grounded Theory Study," *Medical Education*, 47(6), 595-606.

⁹ Poteat, T., German, D. and Kerrigan, D., 2013, "Managing Uncertainty: A Grounded Theory of Stigma in Transgender Health Care Encounters," *Social Science & Medicine*, 84, 22-29.

これは、研究プロセスそれ自体を社会的な構築物（social construction）として扱い、研究としてのバイアスや立場性を受け入れるためのもの。

- 5-1 や 5-2 で紹介した研究とは異なり、研究上の知見は、調査者と調査参加者の相互作用のプロセスを通じて立ち現れていた。比較の方法はここでも用いられているが、データは客観的なものとみなされていない。この研究は、ヘルスケア提供者と患者の関係におけるスティグマの解釈的な理解を提供し、両者の相互作用における権力の影響を強調する内容となっている。

5-4 Clarke の解釈／構成主義／状況主義的 GTM

- Erol (2011)¹⁰は、状況分析のアプローチにしたがって、トルコにおける骨粗鬆症の医療化を調査。
 - 調査者はエスノグラフィックなデータ、文書資料、52 人の半構造化インタビュー、3 回のグループインタビューを実施。
 - 分析は、データの断片化から着手し、のちにそれらを理論枠組みに再統合。くわえて、収集したデータの分析を補うために、3つの異なるマップを作成した。
 - この研究の発見によれば、骨粗鬆症の構成はさまざまな水準で行われている。たとえば、生物医学的な説明では、骨粗鬆症のリスクは更年期に由来するとされ、生活習慣の変化によって予防可能だとみなされていた。生活習慣の変化の一部として、女性がより日光を浴びるために、伝統的な服ではなく現代的な服を着ることが必要とされた。このメッセージを、メディアが拡散・強化し、骨粗鬆症に対する大衆の認識や態度を揺り動かし、場合によっては女性たちの間に不安をもたらしていた。このように、健康状態を行動上の問題として枠づけることは、明らかに文化的な要素に言及している。この研究では、骨粗鬆症をジェンダー化された問題として構成することに寄与する数々の構造的、個人的要因を描き出している。

5-5 GTM の諸アプローチをミックスする

- 研究者は、ある事象を調査するために異なるアプローチを組み合わせることができる。
 - Schnitzer ら (2011)¹¹は、構築主義的 GTM、Strauss と Corbin のモデル、状況分析を用いて、ベルギーのアントワープに住む超正統派ユダヤ教徒の親が、子どものためにヘルスケアサービスを利用する際の意味決定プロセスについて調査。
 - まず、構築主義的 GTM に依拠してインタビューを分析し、in vivo code（＝調査協力者が用いている語）を用いて 1 行ずつコード化。次に、Strauss と Corbin のモデルに従ってカテゴリー間の結びつきを定義し、それらを親たちが援助を求める経路を表現したダイアグラムの中に組み込んだ。同時に、状況分析のマッピングを用い

¹⁰ Erol, M., 2011, "Melting Bones: The Social Construction of Postmenopausal Osteoporosis in Turkey," *Social Science & Medicine*, 73(10), 1490-1497.

¹¹ Schnitzer, G., Loots, G., Escudero, V. and Schechter, I., 2011, "Negotiating the Pathways into Care in a Globalizing World: Help-seeking Behaviour of Ultra-orthodox Jewish Parents," *International Journal of Social Psychiatry*, 57(2), 153-165.

て、異なる人々や集団、状況、文脈、言説が、親たちの意思決定にどのように影響するのかを探った。

- 残念ながら、すべての GTM を用いた研究が、その方法論について透明かつ厳密に記述しているわけではない。
 - これは必ずしも既存の GTM の研究の質を証明するものではなく、むしろ学術誌におけるページ制限といった構造的制約が影響している可能性がある。
- 以上を踏まえて、著者たちは、文化の調査に真剣に取り組む研究では、構築主義／構成主義的 GTM の使用を勧める。
 - 意味、慣習、価値が社会的に構築されており、それらは変化しうるという構築主義的 GTM の認識は、文化の複雑さと平行である。

6 結論と今後の方向性

- 構築主義的 GTM は、文化を瑣末なものとして扱う客観主義的 GTM に代わるものである。構築主義的 GTM は、健康に関する事象の社会的側面における文化の影響を明らかにするのに適していることから、GTM の新たな方向性を示している。
- GTM では、どのアプローチを採用しても、データ収集／構築と分析の間、またデータとメモ、抽象化との間を絶えず行き来する作業を含む。
 - これは反復的な作業であり、自身のデータを見失うことは、自身の理論を危険に晒すことを意味する。